

池田草庵先生に学ぶ会・令和七年六月

「與姪盛」(池田草庵著作集P247～P249)

八月二日

(担当・守本、北見、齋藤、哲彦、高木、俊彦、左起子、繁子、)

「與姪盛」(三)

而心存^二畏慎^一、雖^二病蓐之上^一、不^二敢自怠荒^一、則異日霍然之時、其本根亦大有^二生氣^一、

読み

而して心は畏^い慎^{しん}に在り、病^び蓐^{ようじよく}の上といえども、敢えて自ら怠^{たい}荒^{こう}せず、則ち異日霍^{かく}然^{ぜん}の時、其の本根に亦大なる生氣有り、

言葉

畏^い慎^{しん}||イシン おそれつつしむ 病^び蓐^{ようじよく}||ビョウジヨク 病気の
ため眠っている敷きもの

怠^{たい}荒^{こう}||タイコウ ふしだら しまりがない
霍^{かく}然^{ぜん}||カクゼン ぱつと消えうせるさま。

本根||ホンコン 物事の根本となるもの

訳

心の中には畏れや慎みがあり、病の床の上に寝こんでいるとしても、あえて自ら怠けたり投げやりになつてはいけない。すなわち、これから先いつか病が消えるとき、その根本に大いなる生氣がみなぎってくるように。

古語云、良藥苦^二於口^一、而利^二於病^一、則吾之此言、或雖^レ逆^二其耳^一、

読み

古語に云う、良藥は口に苦し、而し、病においては利す、則ち吾の此の言、或いは其耳に逆らうと雖ども、

訳

古の言葉にある。良藥は口に苦い。しかし、病には良く効用があ

る。則ち私のこの言は、或いは、その耳に逆らうであろうが、

而亦以利_二於心病_一、乃亦盍_レ與_二其瞑眩之藥_一俱一口服_レ之矣、八月五日

読み

而して亦た以つて心の病いに利する、乃ち亦なんぞ、其の瞑眩^{めんけん}の藥を与えて、俱に一口之を服せざるや、八月五日、

言葉

以_二にとつて

盍_二「ナンゾ　ザルカ」　どうして　しないのか　再読文字　反語

瞑眩_二メンゲン　めまいがする。

俱_二ともに

訳

しかしまた、心の病にきく。すなわちちまたどうして、苦しくてもがくらむような藥を與え、俱に一口これをのまないことがあるうか、一緒に飲もう。　八月五日

余已作_二此書_一、而又以爲、盛也方病、不可_レ復以_二

此等之言_一攻_レ之也、乃休、

読み

余已に此書を作り、而して又以つて爲す、盛也^{まさ}方に病い、復た此れ等の言を以て之を攻めるべからずなり、

言葉

方_二マサニ

訳

私はすでにこの書を作った。また思うに、盛也はまさに病気で、これらの言葉によって、盛也を責めては攻めてはいけない。だから休め。

既而又以爲、昔者曾子有言、曰君子之愛人以德、
細人之愛人以姑息、

読み

既にして又以爲^{おも}へらく、昔に曾子言に有り、曰く君子の人を愛するは徳を以てす、細人の人を愛するは姑息を以てす、と。

訳

そこでまた思ったことは、昔、曾子が言っている言葉だった。「君子が人を愛するのは、徳を以てする。心の狭い人が人を愛するのは、その場しのぎだ」と。

乃因^二童子之一言^一、易^二簣於彌留之際^一、雖^二傍人勸止^一、

読み

乃ち童子の一言に因りて、簣を彌留の際に易んとす、傍人勸んで止めると雖えども、

言葉

簣^二すのこ^一 易簣^二エキサク・サクをかう^一 「成語」立派な人の

死をいう

彌留^二ビリュウ^一 病気が長引いて重い

勸^二勧^一 すすめる

訳

童子の一言により、長く寝ている時に、簣^すのこを取りかえ変えようとするときそばの人が止めようとしても、

而不^二敢復過^一時也、先哲之篤^二於道^一、有^二如是者^一矣、然則、
今余之因^二病休^一言者、

読み

而して敢えて復た時を過ぎざらんや、先哲の道に篤きは、是れ如くに有りかな、然らば則ち、今、余の病に因って言を休むは、

言葉

然則^二しかラバ^一 すなわち（すなはち）

不敢^二あえてゝざらんや^一 どうしてゝしないでいられようか

訳

あえてまた時を過ぎることなくいられようか。先哲の道に詳しいのは、このようなものだ。そうであるなら、今、私が（おまえの）病によって言葉を休むは

蓋所_レ謂細人之心、而不_レ復以_二有志待_レ汝也、乃淨_二書一通_一、以相寄示、九月二日、

読み

蓋し謂う所の細人の心ならん、復た有志を以て汝を待たざるなり、乃ち書一通を淨書し、以って相寄るを示す、九月二日、

言葉

蓋_二ケダシ なんぞ……せざる、反語

細人_二心_一が狭い卑しい人

訳

まさしく、俗に言う細人の心だ、そしてまた、希望を持って、おまえを待てないのだ。こういう思いで、一通清書して、前の文書に添えて渡す。九月二日